JAPAN AVIATION HIGH SCHOOL

巻頭特集 上昇気流に乗り、初の全国制覇

日本航空高等学校男子バレーボール部

第74回全日本バレーボール高等学校選手権大会（通称：春の高校バレー）で、山梨県勢として初の全国制覇を果たした、日本航空高等学校男子バレーボール部。フルセットの大激戦を制し、山梨の地に優勝旗を持ち帰った同部に話を伺った。

卒業おめでとうございます

3年生からは高校生活の思い出や伝えたいことのメッセージをいただきました。

前嶋 悠仁
MAESHIMA YUTO

春高優勝がやはり一番の思い出。1年生のときの韓国遠征も楽しい思い出として残っている。3年生の仲間は「誰一人も欠かせない」と自分は思っているので感謝しかない。

山本 聖矢
YAMAMOTO SEIYA

苦しく、つらいこともあったが濃い3年間だった。最後の大会で素晴らしい結果を残すことができ嬉しかった。後輩のみなさん、「らしさ」を大切にそれぞれ目標をもって悔いのない活動をしてほしい。

利川 慈苑
TOSHIKAWA JIAN

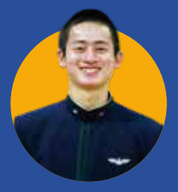
春高に向けて、チーム全員で「優勝すること」を話し合ったことが思い出。後輩のみなさん、また一から自分たちのバレーを作って、試合で楽しめれば、結果は後からついてくると思う。来年も頑張ってほしい。

甲斐市立敷島中学校出身
小林 柊司
KOBAYASHI TOJI

最後の大会が一番の思い出。スターブレーヤーでも、スペックが高いわけでもないが、最後に成長できた。最後まであきらめなければ、やってきたことは無駄にならないので続けてほしい。

久保田 史弥
KUBOTA FUMIYA

インターハイ県予選辞退は悔しかった。その分、チーム全員で春高に行って楽しいバレーをできたことが一番の思い出。後輩のみんなはプレッシャーを感じずに、楽しいバレーをしてもらいたい。

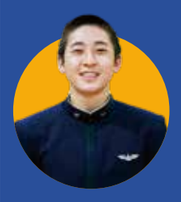


昭和町立押原中学校出身
樋口 響
HIGUCHI HIBIKI

春高で優勝できたことが一番の思い出。インターハイに出られず悔しかったが、あきらめずにやってきたことで結果を出せた。後輩たちにもあきらめずにやってほしい。

大越 宙弥
OKOSHI TOKIYA

苦しいことやつらいこともたくさんあった。優勝した瞬間にその3年間がすべて蘇ってきて感動した。後輩にもセンターコートに立ってほしい。卒業後も応援していきたい。

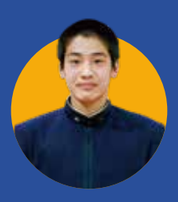


白井 良弥
SHIRAI RYOYA

60期のみんなは個性が強く、面白い人が多かった。ワイワイ盛り上げれる良い仲間だった。やってきたことは間違っていないので、来年もセンターコートを目指してほしい。

望月 勝斗
MOCHIDUKI MASATO

仲間とつらい時も支え合って、困難を乗り越えてきた。後輩のみなさん、3年間辛いことも苦しいこともあると思うが、仲間と一緒なら乗り越えられるので、頑張ってほしい。



伊東 海夢
ITO KAIMU

入学してみんなとすぐに仲良くなり、オフの前日にはみんなと集まって楽しくできた。3年間はすぐ終わってしまうので、最後の春高という舞台で大はしゃぎしてもらいたい。

海老原 朋也
EBIHARA TOMOYA

最後の年、インターハイ県予選に出られなかったことは悔しかったし、それが思い出でもある。今からでも遅くないので、試合に出られるよう頑張ってもらいたい。

つらく苦しい時を経て掴んだ自分たちのスタイルと栄光

オレンジのセンターコートで、拾い繋ぎ続けた最後のボールが相手コートに落ちた瞬間、航空の選手たちは喜びを爆発させた。指揮官である月岡裕二監督は「6試合あった中、1試合1セット1点も気を抜くことができなかった。前嶋が最後に打って、相手リベロが触ったボールが落ちるまで勝利は考えていなかった」。監督就任24年、ここまで本当に長かった、と頭をよぎると同時に選手たちには「本当におめでとう。よくやった」と伝えたそうだ。

2021年初夏、関東大会で王者となり、インターハイもこのまま突き進めるつもりでいた矢先、コロナにより山梨県予選を辞退することになった。落ち込む選手たちを前に、監督は「いつまでもくよくよしていても仕方がない、一歩前に出よう。春高に向け、継続してフィジカルトレーニングをしていこう」と声をかけたという。大学生と練習ゲームを重ね、高さ・パワーに負けないよう、来たる日に向け技術を積み上げていった。「各ポジションに役者がいて、穴のないチーム」と監督が評価するように、年度当初から目指していた「ミスのないチーム」へと着実に成長していったのだ。

県予選を順当に勝ち上がり、20年連続出場となった春高の舞台。堅守のバレーで強豪を撃破し、インターハイ王者へのチャレンジとなる決勝へとコマを進めた。相手エースの活躍で2セットを先取され、さらに厳しい状況の第3セット終盤。「もう3セットやろうよ」と語りかけた監督の言葉に奮起し、諦めずにボールを拾い、繋げ「自分たちのスタイル」を貫く航空の選手たち。コート内の選手全員が自分の役割をしっかり果たし、チーム全員が気持ちを一つにして戦い、大逆転でこの栄光を掴んだのだ。

「バレーボールを楽しむ」その気持ちを心にとめ、体現

「笑って帰りたい」と最後の大舞台を前にそう話していた前嶋悠仁（ゆうと）主将。相手に先行される展開やミスが続く時でも、主将の笑顔がコートの仲間を落ち着かせた。「他のチームは真剣な顔だったり、叫んでいることが多い。自分は他と一緒ではなく、笑顔で冷静に、ということを心掛けていた」。優勝が決まり最後に見せたおどけた表情は「パッと浮かんだポーズだった」と笑った。「自分が獲るとは思わなかった」という最優秀選手賞も受賞。「歴代の方は全日本エースになっているので、ここから自分も頑張らなければ」と、今後も進学し高みを目指すそうだ。3年間苦楽を共にした同級生には「練習の時から支えてもらっていたので、なくてはならない存在」と感謝の言葉を口にした。

高校生活の2年間をコロナに翻弄されてしまった3年生。しかし腐ることなく歩み続け、最高の結果と思い出を抱くことができた。後輩に向け「試合を楽しんで」「楽しいバレーを」と口々にコメントする。基本の練習にプラスして『バレーボールを楽しむ』気持ちを大切にしてきたことも、今回の優勝に繋がったのではないだろうか。

山梨育ちのバレーボーラー「好き」と「努力」が生んだ功績

チームの中心となって活躍した中には、敷島中出身・小林柊司（とうじ）選手と押原中出身・樋口響選手がいる。

兄に憧れて同じ高校を選んだという小林選手。最後の大会は、兄もずっと応援してくれていたという。「小学1年生から始めたが、自分もレベルは低かった。今回結果を残せたことが、地元の後輩の自信にも繋がるのでは。バレーボールが好きな子たちだと思うので、頑張ってほしい」と話す。

小学2年生から始めたという樋口選手も「山梨では勝てない、と言われ続けてきた。自分たちが全国で結果を残せたことで、山梨の人たちにも希望はあると思う。最後までやり切って、こういう舞台で活躍してほしい」と願いを込めた。

ジュニアの頃から地元で努力し続け、開花した能力を最大限に発揮した2人。バレーボール関係者だけでなく、地域の人たちにとっても大きな喜びとなった。

高校からバレーボールを始めたという韮崎西中出身・2年の河内優昇（まさのり）さんは「自分が生まれ育った山梨のチームが、全国ナンバー1になったことがとても嬉しかった」。高根中出身・1年の山崎聖空（せいあ）さんは「県内選手2名がスタートメンバーで活躍している姿を見て、とても勇気をもらった。自分達の代でも頑張りたい」。菊池隼治さんは「自分に与えられたポジション、役割をしっかり果たしたい。今の3年生のレベルで戦えるようになりたい」。小尾滉弥（こうや）さんも「3年生には感謝の気持ちでいっぱい。来年もセンターコートに戻ってきたい」と決意を胸にした。

監督からは「諦めずにチャレンジすれば、結果が得られる。山梨県内のバレーボーラーたちに、もっと大きな夢を持ってもらいたい」とのメッセージをいただいた。

建学90周年に大きな彩りを添えた、日本航空高等学校男子バレーボール部。3年生は次なる世界へと羽ばたき、1・2年生は新たな翼を加え、これからも進化していく。

〝全国制覇おめでとう！〟

監督から3年生へ 成せば成る

〈月岡裕二監督〉学校、関係者の皆さまに支えていただき感謝している。追う立場から追われる立場になっても、チーム作りはこれからも特に変わらない、と話す

〈前嶋悠仁主将〉